

## 論文の和文要旨

論文題目 前イスラーム期アラブの盗賊・無頼詩人サアーリーク：逆転世界のヒーロー

氏名 山本 薫

---

前イスラーム期のアラブ社会は詩を詠むという行為に高い価値を置く社会であった。それを担ったのは主に部族の支配層や騎士といった社会的高位にある男性であり、彼らは自らが帰属し維持する部族社会の価値観や理念に詩作を通じて形を与え、唱道するという重要な公的役割を果たしていた。こうした「部族詩人」と呼びうる詩人たちが詩作の場の主流を成していた時代にあって、一際異彩を放っていたのがサアーリーク詩人の存在である。彼らは沙漠や山岳地帯を舞台に力に任せた略奪・襲撃行為を繰り返す、盗賊や山賊といった無頼の生活を送りながら、詩人としても名を馳せたといわれている。

サアーリーク文学研究は、コーランと共にアラブ・イスラーム文芸の基盤を形成し、その中心課題の一つに数えられるジャーヒリーヤ詩（前イスラーム期のアラブ詩）の全容解明に必須であるのみならず、アラブの盗賊・悪漢文学の系譜の原点として、その理解にとっても意義あるテーマである。しかしながら最初の本格的なサアーリーク研究であったエジプト人研究者ユースフ・フライフの『ジャーヒリーヤ時代のサアーリーク詩人（1959年）』以来、米国のステトキヴィッチによる数本の論考を除き、さしたる進展は見られない。本論はこうしたサアーリーク文学研究のさらなる進展に寄与することを目指すものである。

盗賊・無頼という、いわば異端の存在であったサアーリークの文学は、当時の主流派との関係性を考慮せずにはその正確な理解は得られない。そこで本論ではサアーリーク詩人を部族詩人という主流派との対比において捉え、彼らの文学世界をジャーヒリーヤ詩の全体的な構図の中に位置づけるべく、全編を通じて比較の視座を設定することとした。

本論は大きく2つの部から成り、第1部ではまず詩人論が展開される。第1章『部族社会における詩人

たち一全般的状況』では、前イスラーム期のアラブ社会において詩人が占めていた社会的地位と彼らが担った公的役割を概観する。

一般に父系部族社会として記述される前イスラーム期のアラブ社会にあって、部族の系譜と事績を讃えて語り広め、敵を攻撃・誹謗する詩人の言葉には、理念上にとどまらない実際的な効力が認められていた。その言葉にはある種の呪術的な力が秘められていると考えられていた可能性もある。挽歌のような一見私的なテーマですら、当時のアラブ社会においては重要な公的機能を担っていた。部族社会の中心に身を置き、政治、軍事、外交、儀礼といった様々な分野で重要な役割を果たすことによって人々の信頼と尊敬を集める詩人は、部族という社会システムとその諸価値に強く結びついていた。彼らはそうした諸価値や理念・理想の体現者として自分自身や部族の成員を詩にうたい、それらを欠く者として敵をうたった。アラブの部族社会の価値観や理念・理想に詩作を通じて具体的な形を与え、それらを唱道するこうした「部族詩人」こそがこの時代の主流を成す詩人の姿であった。

第2章『サアーリーク詩人—虚実のはざままで』では、第1章で輪郭を与えられた部族詩人という当時の詩作の場の主流をなしていた人々に対し、サアーリークと呼ばれた詩人たちがいかなる存在と認識されていたのかを、彼らにまつわるアフバール（逸話）の分析から明らかにする。

サアーリーク詩人個々の具体的な姿に迫るほぼ唯一の手がかりであるアフバールは、従来の文学研究においては客観的な史料としての役割を期待される一方、その多くに明らかな虚構性や説話的性格が認められるため、一旦解体した中から信頼できそうな情報だけを拾い上げるというアプローチが常であった。それに対し本論はこうしたアフバールを、詩人の残した作品についての解釈などを取り込みつつ形成されていった歴史的・伝記的事実と虚構とが縦横に入り組む物語（ナラティブ）であると捉え、そこに投影されたサアーリーク詩人像に歴史的存在としてよりも、サアーリーク詩人の作品を読み解く鍵を提供してくれる社会的、心理的、さらには象徴的存在としての意義を認めるべきであると考えた。

その上で主なサアーリーク詩人たちのアフバールを分析した結果、彼らには部族という当時の中心的な社会制度に対する態度に応じて「反一部族」、「越境的」、「疑似一部族」という3つの異なる傾向が見

いだされることがわかった。シャンファラーに代表される反一部族型は、何らかの理由によって出身部族に対する憎悪を抱き、それに対する襲撃・略奪を繰り返すタイプであり、スライク・ブン・スラカやタアッバタ・シャッランに代表される次の越境型は、出身部族を拠点にしつつも個人の欲求を満たすためにそこから自由に飛び出していくという部族の境界線上を自在に行き来する越境性、さらには人間社会とその外部に広がる自然の領域の境界線すら軽々と踏み越えてしまうという意味での越境性もまた顕著であった。そして前イスラーム期においてはウルワ・ブン・ワルドのみが代表する疑似一部族型は、部族の現状に不満を抱き、それに一時的に取って代わる独自の共同体を形成することで矛盾を解消しようとする社会改良的な志向性を持っていた。

しかしこうした温度差にもかかわらず、彼らサアーリークはその行為においても、存在の有り様においても、部族を中心とする当時の社会制度からはみ出る存在、部族社会からの逸脱者としてアフバールに描かれるという共通性を有していた。アフバールに描かれたサアーリーク詩人たちは社会の制度や規範に囚われず、人間離れした特異な能力を持ち、個人的な感情や欲求にしたがって自在に行動する。その行動は反一部族型や疑似一部族型サアーリークにあっては部族という社会制度を脅かすものであり、越境型サアーリークにあってはその制度から距離を置き、時にはそれを嘲笑するものとなる。そこで本論では、このようなサアーリークたちの姿や行動には、ユースフ・フライフが論じたような部族社会内部の弱者・被抑圧者というよりもむしろ、社会制度やその規範そのものから外れ、逸脱する傾向を持った「異人」としての姿こそが認められるべきと考え、部族詩人とは極めて対照的なこうした彼らの特性を「脱一部族性」と名付けることとした。

続いて第2部では詩論が展開される。第3章『カスィーダの構造』は第1章に対応し、部族詩人という主流派が打ち建てたカスィーダと呼ばれる古典詩型の概要が辿られる。

長い歴史と伝統を誇るアラブ・イスラームの詩論にあって、前イスラーム期のカスィーダは一貫して高い価値を認められ、常なる考察の対象になってきた。しかしその詩論は時代の知の傾向によって制限を加えられ、カスィーダの魅力を多面的に解き明かすに至ったとは言い難く、しかもそうした古典詩論は宗教

権威主義に彩られていたために、近代以降もなおその組み替えには大きな困難が伴ってきた。しかし1970年前後から、伝統的なカスィーダ観に挑戦する新たな詩論の試みが欧米でもアラブ世界でも広がりを見せ始めた。その内実にはかなりのばらつきがあり、共通の認識や方法論が確立されているわけではなく、問題点を抱えるアプローチも少なくない。それでも画一的で表層的な傾向の強く見られた従来のカスィーダ観を覆し、その魅力に様々な角度から光をあてようとするこの新たな流れ自体は歓迎されてしかるべきであろう。

本論ではそうした中でも米国人研究者ステトキヴィッチの提唱した「通過儀礼パラダイム」をカスィーダの深層的な意味構造を明らかにする重要な知見であると評価し、それに若干の修正を加えつつ、実際にアルカマという著名な部族詩人のカスィーダに適用してカスィーダの基本構造の提示を試みた。共通の韻律と脚韻を持つ数十から時に百を越える詩行からなる長詩であるカスィーダは、ナスィーブnasībと呼ばれる恋人への憧憬、ラヒールrahīlと呼ばれる沙漠の旅の描写を経て、詩人自身やその部族を誇るファフルfakhr、特定の相手を称賛するマドゥフmadḥ、あるいは誹謗するヒジャーhijā'といったテーマに至る「3部構成」をその基本パターンとすると一般に定義される。しかしなぜそうした複数テーマが決まった順序で立ち現れるのかについては、説得力のある説明が従来なされてこなかったのであるが、「通過儀礼パラダイム」はこのカスィーダの3部構成に人類学における通過儀礼の分離separation→周辺margin→再統合aggregationの過程との相似を認めるという新たな視座を提起した。そして実際にこの方法論に則って部族詩人の典型的なカスィーダを読み解いてみたところ、最後のファフルやマドゥフの部分、いわゆるガラドgharad（目的、本題）と従来みなされてきた部分のみならず、カスィーダがその全体を通じて部族社会の理念や価値観の表出になっていることが確認された。カスィーダには部族社会で求められる人間像の成長、あるいは再生の過程が象徴的に辿られており、また別の次元では、それによって部族共同体の再生と永続的な繁栄が実現される過程も描かれていたのである。

そして最終章にあたる第4章『サアーリークの詩—トリックスターとの近似性を手がかりに』では、第2章におけるサアーリーク詩人論を踏まえた上で、また第3章で提示されたカスィーダの基本構造との対

比において、サアーリーク詩の構造・意味・機能などを総合的に論じられる。

第3章で明らかになったように、部族社会のシステムに合致する価値観や理念・理想の産物であり、また同時にそれらを創出し、維持する装置でもあったカスィーダがまさに部族詩人にこそふさわしい詩型であったのに対し、サアーリーク詩人たちが生み出した詩にはそれとは明らかに異なる独自性が認められる。本論ではそうしたサアーリーク詩の特質を解明するために、第2章でのアフパールの分析から得られたサアーリーク詩人像に認められた逸脱、過剰、策略、秩序の攪乱、曖昧な属性、動物性、利己心といった要素の数々が、神話的ないたずら者「トリックスター」にも共通するものである点に着目し、両者の近似性を手がかりにサアーリーク詩の世界を読み解くというアプローチを試みた。

トリックスター的人物たるサアーリーク詩人のペルソナが主役を務めるサアーリーク詩の世界は、部族的カスィーダにおいて正しきもの、当然そうあるべきものなどとして提唱されるさまざまな事象や関係性が揺るがされ、転倒され、嘲笑される世界であり、こうした社会の価値観を転倒・逆転させるという側面にサアーリーク詩の最も顕著な特徴が認められる。しかしまた一方で、そうした転倒・逆転あるいは冒瀆行為によって、逆説的に、そうした諸価値を社会の成員に再認識させ、それへの信念を強化しさえするという機能がトリックスターに認められるのと同様、サアーリーク詩にもまた様々な反転した価値観を表明することを通じて社会的な通念や美徳、理想といったものの輪郭や所在を明確にするという社会体制の側面にとって肯定的な次元もまた一方で認めることができる。

しかしそれ以上に重要なのが、サアーリーク詩にはより直接的かつ積極的な形で、社会的に美徳や名譽とされている諸価値を確認し表明するという、先に指摘した社会的価値の転倒者や攪乱者としての姿とは一見相矛盾する側面も認められる点である。彼らは確かに社会的な制度や規範から逸脱する存在ではあるのだが、いやむしろそれゆえに、そうした制度や規範の現実のほころびを鋭く批判し、さらにはある種の普遍的な価値や美徳を自らの身に纏うことすらできる。それはまさに人類学者ターナーが指摘した、社会的弱者やアウトサイダーといった人々が、かえって社会にあるべき均衡を取り戻す「力」や「普遍的人間性」を発揮することができるという逆説と相通じる側面だといえる。サアーリーク詩人の作品内世界にお

いては、彼らこそが社会が根本的な部分で価値を認めている美德や名誉の真の体現者であり、「英雄」にほかならない。逸脱者にして転倒者であるサアーリークが「英雄」として振る舞う世界。実はこれこそがサアーリーク詩が有する最大の逆転構造であるともいえよう。サアーリーク詩の世界は社会の価値観を逆転・転倒するという側面と、そうした価値観を確認・確立するという、一見相矛盾する二つの面が両立するアンビヴァレントな世界なのである。